

## 教育情報を取り巻く文化・社会的文脈がスポーツ選手の動機づけに及ぼす影響：日本, 中国, 韓国, ブラジルのスポーツ選手の熟達化過程を対象とした質的分析による日本人に特徴的な動機づけ特質の検討

著者	北村 勝朗, 齊藤 茂, 永山 貴洋
雑誌名	教育情報学研究
巻	8
ページ	1-10
発行年	2009-08
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/48888">http://hdl.handle.net/10097/48888</a>

# 教育情報を取り巻く文化・社会的文脈がスポーツ選手の動機づけに及ぼす影響

## ～日本, 中国, 韓国, ブラジルのスポーツ選手の熟達化過程を対象とした質的分析による日本人に特徴的な動機づけ特質の検討～

北村 勝朗\*, 齊藤 茂\*\*, 永山 貴洋\*\*\*

\*東北大学大学院教育情報学研究部

\*\*松本大学人間健康学部

\*\*\*東北大学大学院教育情報学研究部博士研究員

**要旨：**「教える場における意味を帯びた知」(北村, 2003)として教育情報を捉えたとき, 教育情報を取り巻く文化社会的文脈は意味性の付与という点で重要な役割を担うと考えられる。それ故, スポーツ領域での教える過程を通してなされる教育情報の一つの形としてのスポーツの熟達化を文化の視点から捉える際, 選手がどのような文化・社会的文脈の中に身を置き, そうした文化・社会的文脈とどのような相互作用を体験したのか, といった視点からの詳細な体験の事実の分析が重要となる。本研究では, そうした文化・社会的文脈が熟達化過程における動機づけに及ぼす影響について, 日本, 韓国, 中国, 及びブラジルのエキスパート選手27名を対象とし, 質的分析を通じた検討を試みた。得られた質的データの分析から, 各国選手の熟達化過程には, それぞれの文化・社会的文脈が影響を及ぼしている点が確認され, 動機づけ研究における他者との関係性, 意味性の重要性が指摘された。

**キーワード：**文化・社会的文脈, 熟達化過程, 質的分析, スポーツ選手, 動機づけ

### I. 問題の所在

「意味内容を捨象し, その情報の生じる確率(生起確率)だけで情報の量を定量化する数学体系」(教育工学事典, 2000)といった, 意味内容を捨象した理解がなされる情報解釈に対し, 北村(2003)は, 教育情報を「教える場で生起する意味を帯びた知」と定義づけ, ひとと情報との関係における意味性, 個別性, 広義性といった特徴を視野に入れた教育情報の考究の重要性を指摘している。その理由として, 「教育情報」の考究が, ひとの学びの場における「情報のやりとり」と同時にその背後にあるひとの学びの捉え方をも含むものであるが故に, 情報の作用力としての「意味」の考察が不可欠である点をあげている。

こうした文脈の中で, スポーツ領域での教える過程を通してなされる教育情報の一つの形としてのスポーツの熟達化過程における動機づけに焦点を当てそれを分析対象とする際, スポーツ選手がどのよ

うな文化・社会的文脈の中に身を置き, そうした文化・社会的文脈とどのような相互作用を体験したのか, といった視点からの詳細な体験の事実の分析が重要となる。なぜなら, 動機づけという心理的プロセスは, 「文化的自己観によって構成された社会的現実への個々人の能動的な適応の営みの中から形成される」(北山, 1994)からであり, そこでは個々のスポーツ選手がスポーツ活動と関わる出来事をどのように体験してきたのかという「文化的に共有された自己観」(北山, 1994)が動機づけの形態に影響を与えるからである。特にスポーツ選手が日々の練習や試合に取り組む中で競技力が向上していく過程, すなわち熟達化過程は, 長期に渡って自他を取り巻く環境との相互作用によって成り立つ心理的プロセスである(北村, 1999)が故に, そうした熟達化過程における動機づけの有り様と, 動機づけに及ぼす文化・社会的文脈は, 選手のパフォーマンスに大きな影響を与えることになる。そこで本稿では,

スポーツ選手の熟達化過程の視点から、日本、中国、韓国、ブラジルのスポーツ選手の体験を取り上げ、それぞれの選手が教え学ぶ場で得た体験の意味を読み取りながら比較検討することにより、スポーツ動機づけにおける文化的差異について考察することを目的とする。

## II. 熟達化過程の視点から捉える動機づけ

### 1. 熟達化過程における動機づけ

熟達者 (expert) とは、「ある特定の領域で長期にわたる学習や練習を積むことにより、数多くの知識 (knowledge) や優れた技能 (skill) を習得した者」(冷水, 1982) と定義づけられる。それに対して、学習や練習を始めたばかりで、「まだ未熟な知識や技能の段階にある者」(冷水, 1982) が初心者 (novice) と位置づけられる。この初心者から熟達者へと進んでいく「発達的变化の過程」(冷水, 1982) が、一般的に熟達化 (expertise) と捉えられている。

この熟達化は、「当該領域の意図的な練習活動を10年以上に渡って継続することにより達成される」(Chase & Simon, 1973) とする、いわゆる10年ルールや、「スポーツ競技の技能レベルは1万時間以上にわたる注意深く組み立てられた練習 (deliberate practice) の合計時間によって示される」(Ericsson, 1994, 1996) とする1万時間ルールに示されるように、卓越した技能の獲得に至るまでには長い年月と厳しい練習の過程を要するものである。それゆえ、熟達化過程全般にわたり、動機づけは様々な形で選手の競技生活全体に影響を与えている。換言すれば、熟達化過程においては、高い動機づけと、それを長期に渡って維持することが求められるのである。

### 2. 熟達化に作用する文化・社会的要因

こうした熟達化過程における動機づけは、Csikszentmihalyi (1993) が「卓越したパフォーマンスの獲得は、文化・社会的文脈の中に埋め込まれて初めて実現可能となる」と指摘するように、文化・社会的環境の影響を受けて存在している。この点について大浦 (2002) は、「熟達の多くは社会・文化的文脈の中で達成され、ある種の熟達は文化的に価値づけられ、そのための実践が文化的に組織化されている。熟達はすぐれて社会・文化的な達成といえる」とし、個人の努力という「孤独な作業の連続」

のみならず、「たくさんの人々と文化に支えられている」点を強調している。すなわち、学習者は文化によって組織化された実践活動に参加することで学ぶのであり、そうした実践活動は人々をひきつけ参加させるような要素を含んでいるために、学習者はその活動に参加するよう方向づけられ、その結果、多くの知識・技能が獲得されるのである (大浦, 2002)。

こうした熟達化過程における文化・社会的影響に関し、スポーツ選手を対象として行った先行研究として、西田等による研究、及び北村による一連の研究があげられる (西田他, 2009; Kitamura, 1998; 北村, 1999, 2002)。そこでは、中国、韓国、日本のエキスパート・スポーツ選手を対象とした熟達化過程の適及的分析により、文化・社会的環境によって形成される期待や価値観を選手が潜在的に意識する中で競技への志向性が形成されている点が指摘されている (Kitamura, 1998)。また、選手は、家族や指導者との関わりの中で、勤勉や自立といった社会的な倫理観を潜在的に学習し、それが練習活動への取り組みや自己評価に影響を及ぼしている点が指摘されている (北村, 1999, 2002; 西田他, 2009)。

そこで本稿では、こうした熟達化過程における動機づけにはどのような文化的な差異が存在するのか、エキスパート選手の日常の行動や思考様式の質的分析を通して考察することを目的とする。本研究の最終的な目的が日本人選手の特徴を導くことにあるため、対象者は日本あるいは日本人との関連を深く所持し、日本文化に関する知識やイメージを一定程度所持することで、自身の文化的特徴について意識化することのできるスポーツ選手を選定することとした。そのため、日本に在住してスポーツ活動にかかわっている、あるいは当該国において日本人選手とのかかわりの中でスポーツ活動を行っている、中国、韓国、日本、およびブラジルのエキスパート選手を対象とした。対象者の体験を適及的にたどりつつ、それぞれの文化の中でどのように動機づけを高め、維持し、熟達化を達成していったのかに焦点を当て明らかにし、そこから、日本人に特徴的な動機づけについて、その特徴の抽出を試みることを本研究の目的である。

## III. 方法

### 1. 対象者

対象者は、中国元代表選手4名(卓球競技選手4名)、韓国元代表選手2名(卓球競技1名、サッカー競技1名)、日本元代表選手5名(サッカー1名、水泳1名、ラケットボール1名、フィギュアスケート2名)、ブラジル現プロフェッショナルサッカー選手8名および指導者8名(U15, U17, U19, プロBチームより各2名ずつ)の合計27名である。

対象者の選定基準は下記の通りである。

- (1) 選手歴10年以上
- (2) 各国の代表選手またはプロ選手としての競技実績をもつ
- (3) 各競技連盟等に所属する第三者的な専門家から競技力および指導力に関して高い評価を得ている
- (4) 日本在住あるいは日本人選手とのかかわりの中でスポーツ活動にかかわっている対象者の平均年齢は38.4歳、平均競技歴は16.7年であった。

### 2. データ収集

データ収集は、対象者の指定する練習会場あるいは試合会場において、筆者が直接行った。必要に応じてインタビュー後に通訳者による説明を得た後、後日、フォローアップ・インタビューを実施した。インタビューの平均時間は約60分であった。インタビューは、1対1の対面式で行い、半構造的(semi-structured)、自由回答的(open-ended)、深層的(in-depth)インタビューにより実施した。またインタビュー前後に練習あるいは試合場面の行動観察を行うと同時に、練習中にグラウンドや更衣室等においてインフォーマルな短時間のインタビュー(on-site interview)も実施した。

インタビューは、対象者の幼少期から代表選手に至るまでの競技生活全般について、基幹的な質問項目に沿って自由に語ってもらった。基幹的な質問(main question)として、「当該競技を始められた前後の体験についてお聞かせください」といった尋ね方を用いることにより、競技活動にかかわる体験に与えた影響要因を確認するようにした。また、基幹的質問への回答を受けて、その内容のより具体的な言及を促す追及的質問(follow-up question)として、「どのようなきっかけでそうした活動を始められたのですか」といった尋ね方を用いた。更に、探究的質問(probes)により、「具体的にはどのようなこ

とでしょうか」、「その時にどのようにしてやる気を高めていったのでしょうか」といった尋ね方を用いることにより、熟達化過程における対象者の体験の詳細についての語りの展開を促した(Rubin & Rubin, 2005)。

インタビュー内容は、対象者による承諾を得た上で全てICレコーダーに録音された。

### 3. データ分析

インタビュー後直ちにテキスト化(テープ起こし)された後、Côté等(1993)による質的データ分析法に基づき、熟達化過程における体験について語られた内容を熟達化段階ごとにまとめていった。熟達化段階は、Bloom(1985)による熟達化の3段階に基づき、導入期、専門期、および発展期の3つの段階に区分し(図1)、それぞれの段階にそった体験内容をまとめていった。

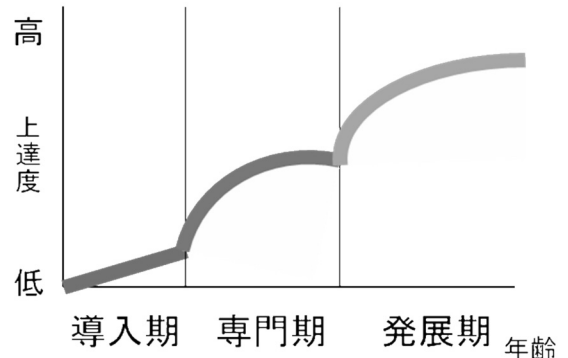


図1. 段階的な熟達化過程 (Bloom, 1985 をもとに作成)

### 4. 信憑性および確実性

質的研究の視点で捉えられる方法論的妥当性及び信頼性に関しては、Miles & Huberman (1994)、および北村(2005)により、信憑性(データのリアリティさ)、及び確実性(データや手続きが当てにできるか)の視点から研究の質の評価に関する検討を行った。対象者の練習場面あるいは試合場面というフィールドにおいてデータ収集を行っている点、インタビューを半構造的に実施している点、質問の構造化による質問内容の均質化の点、行動観察を加えてインタビュー結果の検証を行っている点、により、信憑性および確実性が確保されたと考えられる。

#### IV. 結果および考察

分析からまとめられた対象者の熟達化過程における動機づけの在り様に関し、各熟達化段階ごとに、各国選手の体験にそって以下検討していく。

##### 1. 導入期における動機づけの特徴

###### (1) 中国・韓国選手の特徴

一般的に導入期は、当該スポーツ活動やその他のスポーツ活動に初めて触れる体験を通して、身体活動そのものの魅力や身体活動を通して得られる様々な快体験を蓄積する段階と捉えられている (Côté & Hay, 2002)。図2に Côté & Hay によって示された熟達化段階に応じた練習への移行に関するモデルを

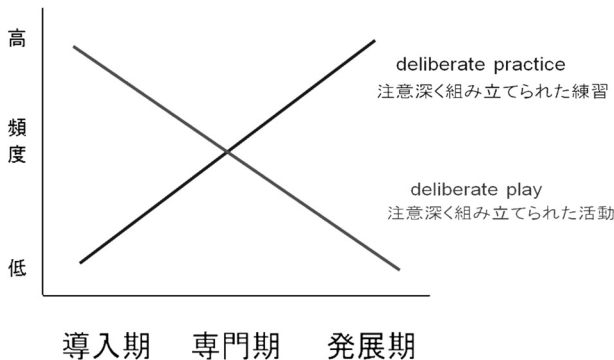


図2. 熟達化段階に応じた練習への移行 (Côté, 2002 をもとに作成)

示した。Côté & Hay によれば、注意深く組み立てられた活動 (deliberate play) は、単なる快体験を享受する無秩序な遊びではなく、スポーツの構造が意識された活動として位置付けられている。例えば、スポーツのルールを変更したりすることで、何らかの形でスポーツの構造が意識された活動である。本研究の対象者である中国および韓国選手もそうした注意深く組み立てられた活動を通して得られた快感情について自身の体験の中で触れている。選手たちによって語られた体験の中で、特に中国および韓国選手において顕著にみられる体験の特徴として、社会的倫理観の潜在的影響を受けた意識構造が導入期における動機づけを形成している点があげられる。この点に関し、以下の発話に注目したい。

「両親は『好きなことは一生懸命やれば必ず上手になれる』といつも私に教えてくれました」

(韓国卓球選手)

「中国の文化の影響かもしれませんが、一生懸命努力することが美德と考えられるような社会の雰囲気を感じていました。遊びであっても精一杯努力しました」(中国選手)

こうした発話から明らかなように、中国および韓国においては、社会の中に潜在的に存在し、人々の態度や行動に暗黙裡に影響を与えている倫理的規範が、対象者の導入期におけるスポーツ活動や注意深く組み立てられた活動に対する態度形成に潜在的に影響を与えている点がみてとれる。この点に関しては、本研究の対象者となっている全ての中国および韓国選手がその体験を語る中で触れている。

###### (2) ブラジル選手の特徴

ブラジル選手に関しても、一般的な導入期の特徴である当該スポーツおよびその他のスポーツ活動を通じた快体験について触れている。その中で、ブラジル選手の体験の語りの中に顕著にみられる導入期の体験の特徴として、当該スポーツの上達や自分自身の変化に対する認知が動機づけに影響を与えている点があげられる。この点に関して、ある対象者は次のように述べている。

「小さい頃から父や兄や友だちと、いろんなところでサッカーをしていました。いろんなことができるようになったり、サッカーがうまくなっていくのがうれしかった」(ブラジル・プロB選手)

この中で語られている親、きょうだいとの共有体験は、活動を共有する場の形成という点で重要な意味をもつ一方、対象者自身にとっては、自分自身の能力の変化の認知に動機づけの影響要因を強く感じている点がうかがえる。すなわち、親、きょうだい、友人といった親しい他者との共有体験を通じた他者との結びつき自体による動機づけというよりはむしろ、自分自身の上達を実感し確認していく過程そのものに動機づけられている点が、ブラジル選手の導入期における動機づけの特徴としてみてとれる。

### (3) 日本選手の特徴

日本選手における導入期の体験の特徴として、親、きょうだい、友人といった近い人々との関わりの意味づけが大きい点あげられる。すなわち、親が見ている安心感を感じて当該スポーツ活動に取り組むといった関わりの雰囲気志向する意識であったり、きょうだいとスポーツ体験の快感を共有する中で自分自身の喜びを見出す意識といった、他者との関係性を志向する形で動機づけられている様子が多く語られている。こうした、他者との情緒的関わりを通して自己の有り様を見つけ、動機づけられていくことについて、ある対象者は次のように語っている。

「親が見てるっていう、にこにこしてくれるその安心感がすごいですね。何て言うか、うれしいうって言うか、発起するっていうか」(日本フィギュアスケート選手)

こうした発話に示されるように、他者との関わり自体、あるいは他者との関わりの中での自己の在り方の意味づけにより動機づけられる点が日本選手の導入期における動機づけの特徴としてみてとれる。

## 2. 専門期における動機づけの特徴

### (1) 中国・韓国選手の特徴

一般的に専門期は、当該スポーツ活動の専門的な練習活動を中軸にすえ、技能獲得を意図した反復練習を蓄積していく段階と捉えられている (Côté & Hay, 2002)。Côté & Hay によれば、遊びの要素を多分に含んだ注意深く組み立てられた活動は、より本格的に構造化されたスポーツ活動へと移行し、その結果、より高度なパフォーマンス獲得を志向した専門性の高い練習活動が蓄積されていく段階である。本研究の対象者である中国・韓国選手の専門期における体験から、そうした反復練習に没頭していく様子が語られている。そこでは、社会的関係の中にある暗黙の期待や価値観と自身のもつ専門的能力を比較する中で自らの欠けている点を認識し、更なる努力に専心することが動機づけの重要な要素となっている。この点について、対象者の中国および韓国選手は次のように述べている。

「私は北京市の代表選手に選ばれてからは、卓球をすることは遊びではなく、私の仕事だと考えるようになりました。私は、政府のために、チームのために、そしてコーチのために勝とうと必死になりました」(中国卓球選手)

「全てのレベルのチームにプロのコーチがいて指導してくれました。選手は長期的な育成計画の中で育てられます。世界で勝てばもちろん自分の名誉が得られますが、国の名誉のために勝ちたいという気持ちも強かったですね」(韓国卓球選手)

こうした発話に示されるように、中国および韓国選手の専門期における特徴として、社会・文化の潜在的な期待・価値観の重要と、それに応えようとする志向性があげられる。

### (2) ブラジル選手の特徴

ブラジルの選手においても、専門期においては自身のパフォーマンス向上を目的とした意図的な反復練習への没頭が多く語られている。特にブラジル選手の場合は、自ら目標を設定し、それに自己を駆り立て、その目標を達成することを志向する形で動機づけられている点が特徴としてあげられる。この点について、ある選手は次のように述べている。

「プロ選手になるために、練習に無駄なことは考えませんでした。技術と戦術を覚え、能力を高めていくことが重要です。自分の能力を信じて、努力すれば、必ず結果がついてきます。私にはその力は十分あると思っていました」(ブラジルサッカー選手)

こうした発話に明らかなように、ブラジル選手においては、様々な状況を通じて比較的不变の特性(能力、努力等)が自己を定義する中心となっている。すなわち、自らの内にある属性に焦点が当てられ、自らの能力を評価し確認することが動機づけの重要な要素となっている。

### (3) 日本選手の特徴

日本選手においても、専門期においては自身のパ

パフォーマンス向上を目的とした意図的な反復練習への専心が多く語られている。その中で日本人選手の特徴としては、意味ある人間関係を見出すことが、そうした練習活動への専心において重要な要素となっている点があげられる。この点について、ある選手は次のように述べている。

「大事なレースでフライングをして泣いている私に『はやく行こうって気持ちがあったからいいんだよ』って言ってくれたのがすごくうれしくて。コーチのためにも自分のためにも頑張ろうって気になりました。私の性格なり気持ちなり、すごくよくわかってきているんです」（日本水泳選手）

「練習メニューをみると、コーチが何を言おうとしているのか、そういうのがわかるようになってきて、それがすごくやる気につながりました。メニューを通してコーチと会話している感覚ですね。考えながら、工夫しながら練習しました」（日本水泳選手）

こうした発話にも明らかなように、日本選手の専門期における練習活動への没頭には、自己の目標追求と同時に、そこに監督や親からの期待といった他者からの評価が重要な要素として含まれている点がみとれる。

### 3. 発展期における動機づけの特徴

#### (1) 中国・韓国選手の特徴

一般的に発展期は、選手の競技力が高いレベルで向上・維持されていく期として位置づけられ、そこではより質の高い練習の構築や、自己モニタリングによる競技能力の探索的向上が果たされていく段階として位置づけられている (Côté & Hay, 2002)。この期における中国・韓国選手の特徴として、そうした自己モニタリングによる役割受容的な自己認知が強くなされている点があげられる。この点について、韓国、中国選手は次のように述べている。

「私自身は、そうした強化選手として選ばれたことをすごくうれしく思いましたし、世界チャンピオンになる機会が得られたことを誇りに思い、またその責任の重大さを感じ、強い選

手にならなければと思いました」（韓国元卓球選手）

「私は7歳の時に選ばれて以来、段階を踏んでより上位のトレーニングセンターの選手に選ばれていきました。選ばれる度にどんどん卓球に夢中になっていきましたし、選ばれたことへの感謝の気持ちと責任感がどんどん強くなっていきました」（中国卓球選手A）

こうした発話に端的に示されるように、中国、韓国選手の発展期における特徴として、自己モニタリングによって認知された自身の役割に重ね合わせた責任、誇り、感謝といった他者志向的な向上意欲が、動機づけの特徴としてあげられる。

#### (2) ブラジル選手の特徴

ブラジル選手においても、発展期においては自己モニタリングにより、求められている役割と自身のパフォーマンスとを重ね合わせた探索的な競技力向上の営みがなされている。特にブラジル選手においては、自己モニタリングの特徴が、成功に対する高い自己評価と、失敗に対する外的要因への帰属といった点にみとることができる。この点について対象者のブラジル選手たちは次のように述べている。

「今回の試合にはレギュラーに選ばれなかったのは予想外でした。練習ではいいプレーを連発していたのに。次はもっと監督にアピールしてぼくの良さをわかってもらおうようにしようと思います」（ブラジルU19選手）

「トップに行けばいくほど、テクニックだけでなく、相手との競り合いやゲーム中の判断が求められます。ぼくの強みはその状況判断の良さだと思います。ただ、その強みが相手や状況によって狂わされることもよくあります」（ブラジルプロB選手）

こうした発話にみられるように、ブラジル選手の発展期の特徴として、まず特性認識的自己認知があげられる。それは能力等の高い自己評価として示される原因帰属のスタイルである。また、失敗の原因

を外的要因に帰属する点も特徴としてあげられる。こうした原因帰属のスタイルによって動機づけられる点が、ブラジル選手の発展期の特徴としてみる事ができる。

### (3) 日本選手の特徴

日本人選手においても、発展期においては自己モニタリングにより、求められている自身の役割と現在の自己とを重ね合わせる探索的な目標志向的行動がみられる。特に日本人選手の特徴として、自己批判的認知があげられる。この点について対象者の日本人選手は次のように述べている。

「選ばれたことをすごくうれしく思う一方で、自分にできるかなあという不安な気持ちもありました。実際、代表の合宿に参加した時はまわりが皆ベテランの選手ばかりでしたし」(日本サッカー)

「支援し応援して下さった皆さんの期待に応えられないときは辛いですね。その時は自分の力不足を痛感します。もっともっと努力して次は勝って期待に応えたいって気持ちが強くなります」(日本ラケットボール)

日本人選手によって語られた発展期の体験の特徴である自己批判的な認知は、目標とする結果やパフォーマンスに到達しない状態に対してなされる、自身の不足や未熟さといった内的不安定な原因帰属とそれを克服しようとする努力への専心によって動機づけられる点が特徴としてあげられる。

## V. 総合的考察

これまでみてきた、中国、韓国、ブラジル、および日本選手の体験の分析から明らかにされた日本人選手の動機づけの特徴について、ここでもう一度整理しておきたい。

まず、当該スポーツ活動あるいはその他のスポーツ活動に初めて触れる体験を通して、身体活動そのものの魅力や身体活動を通して得られる様々な快体験を蓄積する段階である導入期においては、他者とのつながりを重視する動機づけが重要な意味を持っている点があげられる。すなわち、守られている、

認められている、共感されている、といった安心感がつくり出されていることが、この期の日本人の動機づけにおける重要な要因として捉えることができた。また、当該スポーツ活動の専門的な練習活動を中軸にすえ、技能獲得を意図した反復練習を蓄積していく段階である専門期においては、意味づけした社会的関係の中での「相互の関係性」が意識される動機づけが重要な意味を持っている点があげられる。すなわち、自身に向けられる期待の認知、期待に応える自己像、および努力への原因帰属といったことが、この期の日本人の動機づけにおける重要な要因として捉えることができた。更に、選手の競技力が高いレベルで向上・維持されていく段階である発展期においては、他者の期待の中での「～らしさ」に見合う自己実現を重視する動機づけが重要な意味を持っていた。

こうした導入期、専門期および発展期の各期を通じて共通する日本人のスポーツ動機づけの特徴として、選手にとっての自己とは、自身を取り巻く人や事と結びついた関係志向的な実体となっている点があげられる。換言すれば、指導者や家族等の期待に対する自らの不足の認知が、動機づけを形成する一要因となっている。そのため、具体的な社会的状況に応じて定義される特性としての、「～らしさ」、あるいは他者からの認知が自己定義の中心となっている。

こうした特徴を持つ日本人の動機づけに対し、今後、どのようなアプローチが可能か、いくつかの提言を試みたい。

第一に、導入期においては、他者とのつながりを重視する動機づけ方略が有効であると考えられるため、親子、きょうだい、友人といった近い関係にある人と共有する楽しさの体験や、新奇性に富み、称賛が繰り返される体験を多く蓄積することで動機づけを高めていくことが重要であると考えられる。そうした体験により、自分が守られている、認められている、共感されている、といった実感をもつことにより安心感がつくり出されていく。

第二に、専門期においては、意味づけした社会的関係の中での「～らしさ」を明確に意識していく動機づけ方略が重要であると考えられる。すなわち、自身に向けられる期待の認知、期待に応える自己像の育成、および努力への原因帰属といった有能感の



育成や期待提示により動機づけを高めることが、この期の動機づけにおいて重要な意味をもつと考えられる。

第三に、発展期においては、他者の期待に見合う自己実現を重視する動機づけ方略が有効であると考えられる。そこでは、自己批判、すなわち自己モニタリングにより期待への不足分を努力で補うような動機づけが重要な意味をもっている。

第四に、これら導入期、専門期、および発展期の移行をスムーズに行う上で、いかに練習の質を高めつつ専心性を高めていくかについての配慮が重要な意味をもつと考えられる。そのために、導入期から発展期までの間の注意深く組み立てられた活動 (deliberate play) と注意深く組み立てられた練習 (deliberate practice) とのバランスを保つことが必要である。この注意深く組み立てられた活動 (deliberate play) は、活動主体に喜んで参加する活動で、本来的に楽しく、楽しむことを目的とするスポーツ的な活動であり、即座の満足感が得られ、内発的に動機づけられているような活動である。ただし、単なる遊びとは異なり、スポーツ競技に類似したルールが存在し、そうしたルールが自分たちのレベルに合った形でアレンジされている活動である。こうした活動を中心とし、親密な他者との深い関わりが展開されることが導入期におけるスポーツ動機づけの重要な役割を果たすと考えられる。また、注意深く組み立てられた練習 (deliberate practice) とは、努力を要するもので、本来的に楽しみを伴わない練習活動であり、現在のパフォーマンス向上のみを目的とする意図的な反復練習である。熟達度が高まるにつれ、徐々にこうした練習活動へと移行していくことで、動機づけを維持し、高めていくことが可能となると考えられる。

## VI. 結語

本稿では、中国、韓国、ブラジル、および日本のスポーツ選手の体験の分析から、日本人選手に特徴的な動機づけについて質的な分析を試みた。分析の結果、日本人のスポーツ動機づけの特徴として、自身を取り巻く人や事と結びついた関係志向的な自己認知を特徴としている点、およびそうした特徴から、他者とのつながりを重視する動機づけ方略が有効である点が指摘された。

残された今後の課題として以下の点があげられる。第一に、北米やヨーロッパといった国々の選手を対象とした調査研究が求められる。第二に、そうした国々と本稿で考究された国々の選手との比較研究が求められる。そうした研究により、日本人選手に特徴的な動機づけのより立ち入った特徴の抽出が可能となると考えられる。今後の課題として付記しておきたい。

## 付記

本論文は、日本スポーツ心理学会第35回大会 (平成20年11月14日) のシンポジウム (スポーツ動機づけと文化) で報告した内容と、西田他 (2009) の論文の内容に、より詳細なデータと内容を加筆し作成したものである。

## 文献

- Bloom, B.S. (1985) Developing talent in young people. New York: Ballantine.
- Côté, J., Salmela, J.H., Abderrahim, B., & Russell, S.J. (1993) Organizing and Interpreting Unstructured Qualitative Data, *The Sport Psychologist*, 7, 127-137.
- Côté, J. & Hay J. (2002) Children's Involvement in Sport: A Developmental Perspective. In *Foundation in Sport Psychology*.
- Csikszentmihalyi M., Rathunde K., and Whalen S. (Eds.). (1993) *Talented teenagers*. Cambridge University Press.
- Ericsson K.A. Ericsson, K.A.& Charness, N. (1994) Expert performance: Its structure and acquisition. *American Psychologist*, 49, 725-747.
- Ericsson, K.A.,& Lehmann, A.C. (1996) Expert and Exceptional performance: Evidence of maximal adaptation to task constraints. *Annual Review of Psychology*, 47, 273-305.
- Katsuro Kitamura & John H. Salmela. (1998) Talent Development of Elite Athletes in Asian Countries. *Journal of Applied Sport Psychology*, Vol.10, (114)
- 北村勝朗 (1999) スポーツ選手の「才能」発達における Deliberate Practice 理論の検証：中国卓球選手の事例をもとに。東北体育学研究第 17(1), 1-10.

- 北村勝朗 (2002) ブラジル・プロフェッショナル・サッカーコーチを対象としたコーチング行動分析. 東北体育学研究 20(1), 1-10.
- 北村勝朗 (2003) スポーツ・音楽・芸術領域における「わざ」習得過程の定性的分析による「教育情報」の解釈. 教育情報学研究 1, 77-87.
- 北村勝朗 (2004) 「教育情報」の視点による「コーチング」論再考: ブラジル・プロフェッショナル・サッカー指導者の指導実践を対象として. 教育情報学研究 2 71-80.
- 北山忍 (1994) 文化的自己観と心理的プロセス. 社会心理学研究 10(3), 153-167.
- 日本教育工学会編 (2000) 教育工学事典. 325.
- 西田保, 磯貝浩久, 北村勝朗, 杉山佳生, 伊藤豊彦 (2009) スポーツ動機づけの異文化間研究に向けて. 総合保健体育科学32(1), 31-40.
- 大浦容子 (2002) 熟達化. 波多野誼余夫・永野重史・大浦容子. 教授・学習過程論: 学習の総合科学をめざして. 放送大学. 69-78.
- 冷水啓子 (1982) 長期にわたる学習. 波多野誼余夫編. 認知心理学講座 4 学習と発達. 第4章. 133-153

**A cross-cultural study of the effect of the social and cultural context  
for the athletes' motivation in Japan, China, Korea and Brazil:  
from the information in educational contexts perspective**

**Katsuro Kitamura<sup>1)</sup> , Shigeru Saito<sup>2)</sup> , Takahiro Nagayama<sup>1)</sup>**

1) Graduate School of Educational Informatics Research Division, Tohoku University

2) Matsumoto University

**ABSTRACT**

This study sought to qualitatively examine a) the experiences that the expert athletes form in the process of the expertise in Japan, China, Korea, and Brazil, b) the sources of the cultural information used to form such experiences in Japan, China, Korea, and Brazil, and c) the characteristic found in Japanese athletes. Twenty seven expert athletes completed a semi-structured interview examining their perceptions of sport motivation. Interview transcripts were subjected to deductive content analyses. Eighty-two raw data themes, eighteen first order-themes and six second-order themes emerged. Participants formed their perceptions of their sport motivations. The characteristic found in Japanese athletes were 1) a sense of reception in the initiation phase, 2) mutual relationship in practice phase, and 3) development of a sense of identity as an athlete. The study indicates that cultural context influences the forming process of the sport motivation in elite athletes.